

歌集

ひらく

望月裕二郎

目次

I

II

菅沼さんのバック・ハンド

24

ワンピースごっこ

28

カノコ抄

30

III

鼠色

36

笑う

42

ごめんなさい

52

LOVE BOAT

57

馬鹿

58

いくつかの土地と場所と

63

さつきからアメリカ

69

出でよ

74

電車

79

いつも忙しい手

83

灰色

87

I

さかみちを全速力でかけおりてうちについたら幕府をひらく

空のふかさはかっているが（だまつてる犬ども）ここは土地か時代か

生きるときの言葉をわすれてしまったちわわとかわるがわるに生きる

まちがいのないようにならないように馬なでているその手のひらに油

わたしの顔はどこまでものびるみじかいは水彩画家のかいた虹だろ

もう人とはなさなくてもいい馬の延長としてかたむける耳

わたくしはいつからドアか（べらんめえ）くるった活字にしよう油をこぼす

なお耳を燃やしつづけるのはあぶないきつと蛇口をひねってやる

そのほうがおもしろいのか道草はうまいか絵でいてつらくないのか

ふれたらこぼれそうな月だな一枚一枚きれいにはがしていいよもえるごみ

おじさんがそうでなくなる瀬戸際のたのしい草木にうでつつこんで

おおきすぎてわたしの部屋に入らない栗がでてくるゆめにひとしい

ともにあるいてゆくつもりはないそのまんまむかれた蟹の脚でいてくれ

ねがいから鼻をとおしてなあ牛よおっぱいはここであっているのか

なでさするきもちがいつも電柱でござる自分をあいしてよいか

あらたな助詞がうまれないよう見張ってる蝙蝠でいるのもつかれたな

おじさんが株のはなしをしてるのにどうしてわたしは剥けているのか

ろうそくがそうでなくなるまでなめてつい虫偏になってしまおうよ

(さつきからすけべな音がしてるなあ) 新茶を東京都がすすつてら

ちんぽこという川を背におじさんは立ったままものがたりであった

みつめあいながらうなずきあいながらまだあぶらぜみをやっているのか

いっこうにかまわない土地をとられてもその土地に虫がねむっていても

よだれしか垂れないちまた（ゆめみたあい）汗も涙も川もこおって

さよならのむこうがわには手があっておじさんののどからでてたっけ

回転木馬でわたしは泣いていてこれはおっぱいを軸にまわってるのか

あやまって井戸におっこちたおじさんは助動詞がたりなくてこまってる

つながれて（なにをしやがる）おしっこがしたいわたしに穴という穴

こんな日本語くいたかねえといわれ（やだあ）わたし、日本語となるまでの生

かたの荷をひとつおろしたわたくしに（おじさんじゃなく）べたべたの床

ぬけては生える中学生じゃあるまいしわたしに助詞をおいていいです

ちよと駅までというにもわたしは動物でむずかしさってというのがずっとある

玉川上水いつまでながれているんだよ人のからだをかってにつかって

おまえらはさっかーしてろわたくしはさっきひろった虫をきたえる

(生きいそぎたくないねえ) 山もこんびにもみんなおならだせいきのおわり

おじさんを破裂からきょうも守ったもうしやべらない蛇口となつて

おじさんがすつてる (どうもしやばいらい) わたしのちくびにしずむ夕日を

みのりある嘘にかこまれおじさんはうすいうすい息をきたえた

だらしなく舌をたれてる（牛だろう）（庭だろう）なにが東京都だよ

ひたいから嘘でてますよ毛穴から（べらんめえ）ほら江戸でてますよ

おじさんが割れる（ひでえなあれぎゅらーで三回戦とつぱしたんだぞ）

しゃべるたびみじかくなった（くるしゅうない）わたしにみんな頭がさがる

油でもさすか空しかみえないしけれどわたしは空ではないし

菅沼さんのバック・ハンド

菅沼さんに似てる人がいる
あれ、うまく菅沼さんが思い出せない

*

菅沼さんは高校テニス部の先輩であった

菅沼さんにバック・ハンドを教わりてわれはしばらくスランプに入る^い

テニスは下手だった

ニコ上の菅沼さんをけちよんけちよんに降したあとのこの気持ち良さ

それでも三年生の引退試合となる団体戦では、最後だからってことでレギュラーに選ばれた

「試合に参加できないみんなの分も頑張るから応援よろしく」ってうるせえ

わが校は初戦、二勝二敗で菅沼さんの試合を迎える。ここで勝てば初戦突破であった

菅沼さんがウオーム・アップを始むるにわれら帰りの支度を始む

やっぱり負けた

菅沼さんのバック・ハンドが振り抜かれ球は見事にフェンス越えたり

解散のとき、菅沼さんの目には涙が

夕暮れの改札　こちらを振り向かず彼は正確にS u i c aをかざす

でも

改札に股間を強打せられけり S u i c a のチャージが足りなくて菅沼

*

忘れたモノの数だけ賢くなる僕ら
そもそも名前は菅沼だっけ

ワンピースごっこ

初夏はつなつの椋鳥の雛は日の出よりちちちちちちちちおっぱいがほしい

町中まちじゆうの人がいなくなる夢を見ておしやれでいなくちやいけなと思う

石鹼を齧った朝におもいだすあなたの汗の味のないこと

あなたの云う愛はと問えば巻き髪の子高生から逃げてせつくす

「いやらしい眼で俺を見ろ」
いつだってわたしは鏡を信じる（つながれ）

カノコ抄

塵ほどのチップに愛を書き込んで子供ができたら名前はカノコ

新型のセクサロイドはしてくれる僕とセックス以外のことを

塵ほどのチップに接触不良ありカノコが猫を認識しない

アスファルトを~~ツツ~~僕は月に繋~~キ~~・て機械が悲しい~~ヲネ~~・~~キ~~・~~ゴ~~・~~ダ~~・~~ハ~~・

ハ~~ツ~~・~~タ~~・~~鬢~~ハ、~~ク~~・~~滑~~ツ、~~ホ~~・~~ツ~~・~~タ~~・~~鬢~~ヲ~~ホ~~ヲ~~サ~~ツ、~~ア~~、~~・~~・~~カ~~、~~・~~・~~カ~~ヲ~~ア~~、~~キ~~・~~ニ~~・~~ツ~~、~~・~~・~~ニ~~、「~~照~~ヤ、~~ネ~~・~~ヲ~~

*

塵ほどのチップに接触不良ありカノコが僕を認識しない

旧型のセクサロイドが故障して僕の名前を呼び続ける夜

パパ、パパと僕に抱きつくカノコが抱くアンテイク仕様のぬいぐるみ

鼠色

朝刊がポストへ沈むとき僕に鞆丸の冷たさは優しい

そんなはずないんだけどと云う前に夢から覚める 人間になる

どんよりと朝の牛乳飲み干すに室内温度計の一定

冷水をやかに張って湯を沸かす想像力の及ぶ範囲で

雨音の届かない部屋で膨らます僕たちアフリカのイメージを

フルートやトランペットじゃあるまいし銀婚式はやめておこうね

大口開けたシーサーが廻るオルゴール僕はもつと聴いていたけど

飛べるといふ気概をもって僕たちは投げ出されていた　ビルを食む馬

雲一つない空だからタンバリンがぼとぼと降って来ないでよかった

カブールの犬がモスクに脱糞し今夜は東京でくくと雨

木造でそろそろやばい電柱にチワワがおしっこするから僕も

トイレの蛇口強くひねってそういえば世の中の仕組みがわからない

伝えたいことの不在を伝えたい 便器、おまえは悲しくないか

もう誰も信じたくない十月の立って飲むべきコーヒー牛乳

だんだんと冗長になるセックスの明日何時に起きるんだっけ

数多ある競合他社に打ち勝った枕で今日も眠らんとする

笑う

この世界創造したのが神ならばテーブルにそばろ撒いたのは母

〈きれいな眼、お母さん似〉羽虫とのキスで始まる春の静けさ

ぼく部屋で音楽を聴いているのに工事現場で知らない歌が

繰り返し自分の名前をつぶやけばそれは自分の名前でなくなる

水曜を延長すれば金曜になるし土日にもなりうるし

昼休み上着を脱いだらいつせいに紫陽花咲き乱れるオフィス街

紫陽花の中でわたしは紫陽花の中のわたしを見ており恐ろし

「一体誰がファックスの音考えた」「自然にできた」「そんなはずない」

永遠に分かち合えないきんようの夜にあごひげぬく気持ちよさ

きのうまで自由の国で走らせた無線操縦自動車の行方

人の数だけ世界はあつてわたくしの世界では人が毎日死んでる

戦争を経ての平和と金齒見せ笑うおばあちゃんになりたい

世界一かわいい犬を手に入れた女帝が今夜自殺を図る

確乎たる意志をもって僕たちがペットボトルを開けるといふ嘘

ばくだんがそらからふってくることはないというあんしんどようび

目覚めれば地球は今日も窓枠に朝陽を引用して回りだす

寝不足の朝に陽光はまぶしくてすべての色が嘘であること

曇天の朝の新宿の溶解の歌舞伎町を見なかったことに

新宿の混沌カオスそのまま暖かい齒磨き粉色の空に笑えば

人・吐息・季節・伝言トワイニング・とんだ嘘・空は雲のみ空に行きたし

空を飛ぶとは良き発想なりヒヨドリは羽裏をちよつと僕らに見せて

夕焼けが丸井を赤く染めているさつきまで太陽だったのに

朝目覚め枕にキスしてもう誰が好きだかわからなくなる日曜

今日は朝なので朝から洗濯機を回す回る洗濯機は朝

冬の香にメリーゴーランド飛び降りる このわくせいの回転は確か

真夜中のアスファルトに寝る黒猫が黒猫である不思議つやつや

東京は猫の町なり猫議員選挙があらば投票に行かん

舞う雪をつかまえている手を見ればきつときれいな絵を描く人

朝刊に刷られる曜日はきらきらといま片足で歩く犬がいる

ごめんなさい

吹田市は「すいたし」と読む「ふきたし」と読めばそこから砕ける地球

いわゆるギャルの恰好をした君が云う「後生だから」にやられてしまう

あの青いストッキングに触れたならばん殴られたりするんだろいな

スパイマンの「パ」の「。」のところ陳列のための穴あり 道徳が邪魔

鱈戸躰慶譚摩顛が現れて漢字の読みだけ教えてくれる

朝貌は花を鎖してやすらふを頼みもしないのにケータイにテレビが付いてくる

「蒼井優にもし生まれてたら人生が変わっていた」とパフィーの由美が

母さんが大塚愛を歌うからそれも短歌でいいよじゃあもう

銃乱射事件の起こらない町で Dr. コパを耽読する母

多くの哺乳類が四本足であり母二本足で廊下を駆ける

僕に向かって自転車をこぐおじさんよお願いだから前を見てくれ

トランクスを降ろして便器に跨って尻から個人情報を出す

ボンドとボンド・ガール以外はみんな死ぬそこから人類やり直せばよい

LOVE BOAT

少女らは世界を救う

(あいしてるあいしてる)

船は少女を救う

馬鹿

この町でもつとも馬鹿な花嫁が笑って投げたブーケは黄色

「来年の春またここで」うそだろうにぎるんだろうくわえるんだろう

この国で月をムーンと呼んだなら僕は君を愛さなかった

笑わないあまり舐めない長くしない眼を開けないからキスしてもいい？

トラウマを消してあげるよかわいくないかわいくないかわいくないかわいくないかわいく

「きみのことカンブリア紀から知ってたよ」
他人事ひとごとみたいなデープキスする

然るべき塩の風味がするけれど飲み込んじゃだめ歯磨き粉だから

夜眠くなるのが君で朝起きれないのが僕って役割分担

暗算の苦手な君が切るケーキ「幸せなふりやめてくれない？」

ハンプティ・ダンプティといまにも叫びそうな君が読む厚めの文庫

寒い朝サイズの合わない靴はいて僕だけのものにならないでほしい

誰もいないリビングでガムふくらませ甘く湿ったくちづけ 僕と

いくつかの土地と場所と

鎌倉

イヤホンをはめてすべての窓を見よう さよなら東京 さよなら東京

触れたなら動き出しそう布袋様 平和は望むものではないと

かまくらやみほとけなれど釈迦牟尼はパンチパーマでピアス痕あり

江の島

ひっそりと岩屋に眠る石像がライトアップされ緊張してる

白波は削り削られガウガウと脈打つ海の心臓はどこ

江の島の階段をもともしない CHANEL 着た犬てててねねね

昨日までの自分を連れてまた行かんち小さき江の島大き鎌倉

葛西臨海水族園

止まったら死ぬ魚見る人間は止まっても死なないから止まる

ペンギンが餌を求めて飛ぶときの北の故郷の祖母の脱糞

ツナトマトスパゲッティを食べている僕らはすでに食べられている

ミスタードーナツ

母の口から垂れているドーナツは繋ぎ繋がれ我れの口まで

ドーナツをそれとして齧れば齧り始めた場所で齧り終わる

小石川植物園

パピルスの葉に触れてみてわたくしがパンク・ロックを好んだ日々よ

植物園の梅に喜ぶ僕がきょう素通りして来た梅の数々

鉄道博物館

永遠に來ない列車を待ち続けすこしづつ液化してゆくレール

首都東京をのぞみ500系貫けり祖父を殺めし銃弾のごと

サンシャイン国際水族館

いつまでもきれいでいろよっておまえ凍ったウミガメが降ってくる

さつきからアメリカ

テロ活動をすることを目的に入国するつもりですか。 はい いいえ

アメリカを覚えている？ と訊かれれば静かに羽をもたげ旅客機は

高度一万メートルを信じないそこでのスイカの種は信じる

because が云えないままに青い空 さつきからアメリカに来ている

おまえのギャグが伝わらないのはジャパンでも同じだろうとジーザスの声

おれら母国を愛***さず朝よりイキイキと金髪美女とベッド・インの夢

Pardon? が聞き取れなくて Pardon? と聞き返す人と結婚しよう

染めすぎたオレンジの髪結いながら「たまたま地上にぼくは生まれた」

William Carlos Williams "This Is Just To Say"

朝食用冷蔵プラムを食べましたおいしく甘く冷たくゆるして

天才打者の放った白球ジェット機に変わってジャパンまで届け空

どこにいて何をしてるか僕たちは大口開けて噛むアメリカのガム

感じる、と月が嘯く夜だから眠ってもいい僕より先に

感想と具体例のない僕たちがコーラの蓋を閉めて眠る夜

出でよ

ローソンの角を曲がれば黒猫の昼寝が町をわれを食べたり

余りにも左を奔れば余りにも右を歩く子供を轢き殺す

スクランブル交差点をいま渡りたる一人ひとりに捲^{めく}れゆく意志

パノラマの夕日に向かって飛び越える歩道橋の欄干がジオラマ

つくねんと東京の夜に乗った月滴れるをわれは舐めたり

おお、われの口から出でし一行の詩がビルディングの間泳げりあわい

長きこと出し忘れたる文ふみのあり黒きポストがわが腕捕らう

駅階段を駆けて上がれば花売りのおゆくゆむくゆ売れ残る花

苺ジャム煮詰めてゆけばあなたほら右の耳からかかと踵が生える

君と手をつないでいたって裏返ると思つて歩く霧雨の中

胸骨を指でなぞつて幸せかすぐにわからなくなる湖

秋刀魚焼く母に手を振り明日から日付変更線の灯台

山火事のように山染める夕焼けをめぐって紙芝居が始まる

電車

寝不足の朝は脳内宇宙旅行出発します満員電車

愛という中吊り広告耳にタコ 五千回目の晴れた月曜

永遠の黒い線路に指はさみ今一瞬を踏みしめてもらおう

池袋線に未練を残しつつ逸れゆく豊島線のかわゆし

まいんざぎやまいんざぎやつぷまいんざぎや俺とおまえは違う人間

いろんな急行電車に乗ったことがあるその僕のために生きるあめんぼ

網棚を初めて使うもう二度と戻れないとは知っていながら

立ったまま寝ることがあるそういえば鉛筆だった過去があるから

つり革に光る歴史よ全員で一度死のうか満員電車

いつも忙しい手

夏の快樂計算を間違えた子が晦日えにつきに描くロマネスク

ロックフェス連れてこられた子供らに未来禁止の耳鳴り続く

病院の窓からこっちを睨んでる十年前の僕と目が合う

そくらてすありすとてれすびたごらすきらきらと僕ら通学路違反

グリーングリーン歌う教室その横で先生言えり「泣きたいとき泣け」

蝋燭をそつとかじった妹よクレヨン色の明日あすみて眠れ

何が変わるわけでもないのに僕たちははにかみながら戦争したね

点滅する電球眺め僕たちはかつて無邪気でありましたか

冷やし中華のうへのトマトのつぶつぶからトマトが生まれるトマトだった夏

降りつづく雨も癒せぬ真夜中に五時のチャイムを聞いた気がした

毎日の手洗いうがいで見えてくる世界を信じろ

明日は無いか
FOREVER YOUNG

灰色

誰か後ろに立っているような気がしつつ顔を洗えばひらく朝顔

忘れた朝の数だけ賢くなる僕ら人間として食パンを焼く

つやつやのチーズを皿に盛り付ける無思想という思想をもって

へカフェ・オ・レの香り付けにブランデーをアスファルト濡らす霧雨に火を

さつきから食卓で光る爪切りが僕に示唆することの全てよ

君からの電話で揺れる携帯のもう零れたい液晶画面

雨上がり草いきれのなかロック聴く僕が人間であるということ

乗用車の下で黒猫は人間になる夢を見る 息をしながら

曇天の高架橋の下誤って昨日を映してしまう水溜り

この世界で信じてもいいイヤホンの中のドラマーのタムタム連打

落ち合えば君の隣に僕が立つ首から下の僕の中からだが

もし空が海だったらと考えて考え終わってドア閉まります

海風で壊れるからだなら海のない町だから噛む君の肩

鈍行は夕日を重く引きずって壊れないここは誰の箱庭

鈍行が急停車して夕暮れのポストが見える灰色と思う

死にながら暮れてゆく町の正しさを僕はエレベーターにて放屁

君は手を握ってくれるもしかしたら Windows かもしれない僕の

アマゾンの蝶が鱗粉ふり撒いて山手線のダイヤ乱れる

水しぶきを浴びるために来たデイズニーで僕はミッキー・マウスを見た

右足の次に左足を出して歩くミッキー・マウスも僕も

ミツキーのペニスが置かれる売店をどうして見つけれない僕たち

月光に晒されているマネキンのそろそろやばい内耳の痛み

閉店のショー・ウィンドーに映る僕のくちびるが君に何て云ってる

頷くとき君は知らずにまばたきをしてしまう　今すぐに触れなきや

地下鉄の隣の席のお喋りのふむふむそうだろう中国語

終電の窓が切り取る一瞬のおばさんの欠伸を見て僕も

高架橋を走る電車に乗ったまま朝焼けを見てしまう気がする

アスファルトに行く僕は月に繋がれて機械が悲しいことを知ってる

冷凍のギフトを運ぶトラックが信号無視の黒猫を轢く

さしあたり永遠であれ人間の夜の舗道を伸びる白線

歌集 ひらく

発行日 二〇〇九年十二月十五日

著者 もちづき ゆうじろう
望月 裕二郎

印刷所 株式会社オーエム

